

---

# 茨に咲く君と

奏多

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

茨に咲く君と

### 【Nコード】

N0273BA

### 【作者名】

奏多

### 【あらすじ】

前世をなによりも尊ぶ国アロイス。そこでは前世で縁があつた相手を伴侶に迎えることが最高とされている。ただし、そのためには前世が正しいものであるということを、司祭達の行う『審判』という術で証明されねばならない。

その審判結果を理由に、アーシャは顔見知りの地主ロンハに拉致された。もちろん彼女は逃げ出したが、途中で司祭エクレシスに出会う。訳を話してロンハが不正をしたに違いないと訴えたアーシャだったが……。

## 第一話

思い出すのは茨に咲いた白い花。

指の痛みをこらえながら棘を摘み、闇にまぎれて一輪だけ袖の中に隠した。

く　＊　く　＊　く

窓の下は、茨の這う垂直な煉瓦の壁だ。地面の様子は夜の闇に紛れてよく見えない。

そしてアーシャは木綿の簡素な寝間着を着ただけで、木靴さえ履いていない。赤茶の冴えない色の髪だけは、絡まないようリボンで結んでいた。

普通なら、部屋の外に出ることさえためらう格好だ。

「だからって、大人しくしてられないもの」

アーシャは自慢の頑丈な歯で、食いちぎるように寝台のシーツを破る。それを両手足に巻き付け、いざ窓枠を乗り越えた。

太そうな茨の蔓に足をかける。

蔓はしなりながらも千切れたりもしない。布を隔てても茨の棘が足裏や手のひらをちくちくと刺すが、我慢できなくはなかった。

いける。

アーシャはそう判断すると、急いで茨をつたって暗い地上へ降りた。

よもや窓から脱出するとは思わなかったのか、降り立った館の庭に警備の人間はいないようだ。ほっとしたアーシャだったが、

「あ、こらアーシャ！」

二階の窓が開いて、中から叫ぶ人影が見える。

クセのある茶色の巻き毛をした青年。彼は貴族風のジャケットにひらひらとしたクラヴァットを身につけている。彼こそがアーシャを攫い、自分の屋敷に閉じ込めた本人、この周辺の地主であるロンハだ。

「一体何が不満なんだ！」

「全部に決まってるでしょう！　こんな誘拐みたいな真似されて、結婚するわけないじゃない！」

捨て台詞を残しアーシャは走り出す。棘に刺された足が痛んだが、かまっていられない。

ここにいたら、数日後にはロンハの妻にされてしまうのだ。

ロンハはついこの間まで、貧乏牧場の小娘とか、みずばらしいさび色の髪だなんだと、顔を合わせる度アーシャに悪口を言ってきた人間なのだ。

しかも一ヶ月前、アーシャの両親が所有している丘を売るよう交渉しに来て、追いつ返されている。丘が欲しいがためにアーシャと結婚するつもりに違いない。

そう疑ったアーシャは簡潔に「お断りします」と答えた瞬間、ロンハに攫われ、婚礼の日までゆっくり滞在してくれと館の一室に閉じ込められてしまったのだ。

しかも本来なら親がアーシャを返せと言いにきてくれるはずだが、それを期待するわけにはいかない理由がある。

「前世を思い出したなんて、絶対嘘よ……」

このアロイス王国は、前世の記憶を持つ者が尊ばれる。

時と運命の神ラトレイアの恵みが深い証明、とされるからだ。

そのため前世を思い出した者が、前世で縁あつた者との婚姻や養子縁組を望んだ場合、司祭達の承認を得てしまえば、身分差があるうと誰も異論をとえられなくなるのだ。

ロンハは前世を思い出し、それを司祭の秘術である『審判』によつて検証し、承認されたと言つていた。反論すれば、神さまの意志に反したと周囲から責められるだろう。

これを覆す方法は、実は一つしかない。アーシャも『審判』を受けてロンハが嘘をついていると証明することだ。

が、アーシャには審判を避けたい理由があつた。

そのためアーシャは次善の方法として、王都の祭司府へ行き、中央にいる司祭にワイロで審判をねじ曲げたことを告発しようと考えたのだ。

森のように広い庭を駆け抜けたアーシャは、ようやく館を囲む塀までたどりつく。ここも防犯対策が単に生息地だったのか、塀にはこれでもかと茨が這つていた。

茨は嫌いだ。嫌な夢には、必ず出てくる。

けれど今はそんな理由で尻込みするわけにはいかない。茨を利用して塀の上まで登ったアーシャは、

「しまった」

塀の向う側には茨がなかった。

高い塀の上だ。飛び降りたら骨折ぐらいはしそうな気がした。

恐くて、塀の上にしゃがみこむような体勢のまま動けなくなった。その時、遠くから騒ぐような声が聞こえてきた。だんだんとアーシャのいる場所へ近づいてくる。

迷つてゐる場合じゃない。やらなければ。それに後ろ向きな思惑だ

が、骨折したら完治するまでは結婚話も延期されるはず。

（飛べっ、アーシャ・リネイス！）

アーシャは心の中で叫び、自分を鼓舞した。  
そして思い切って塀から飛び降りる瞬間、

地上に月が落ちてる。

そう思ったのは、黒い衣服を纏ったその人が綺麗な金の髪をして  
いたからだ。

「あぶなっ！」

ぶつかってしまつと叫んだアーシャは、他人様を蹴り倒す大惨事  
を想像して背筋が凍る。

が、その人は慌てず、しっかりとアーシャを受け止めてくれた。

相手に怪我をさせなかったことにほつとして、アーシャは胸をな  
でおろしてお礼を言おうとして 彼の顔から目が離せなくなる。  
月色の髪をした青年が、目を見開いてアーシャを見下ろしていた。  
白皙の頬をした秀麗な顔立ちの中、南天に輝く星のような銅色の瞳  
が印象的な人だ。

アーシャよりも数歳上だろうその人に、瞳が吸い寄せられたまま  
離れなくなる。どこか懐かしい気持ちにさせられる、月色の髪が風  
に揺れている。

呆然としていたアーシャだったが、ふと彼の服に気づいた。

「司祭……様ですか？」

黒い詰め襟の上着と下衣に、黒に銀系のクロークを纏うのは司祭  
の正装だ。銀の留め金には、茨が彫り込まれている。

しかし青年はアーシャの問いかけに答えない。

彼も何かに驚いたようにアーシャの頭を凝視していたのだ。  
が、やがて我に返ったように地面に彼女を降ろしてくれた。それからアーシャの髪に絡んでいたのだろう、茨の葉と花弁をそっと取り払い、ようやく答えてくれる。

「確かに私は司祭職にある。王都へ戻る途上で通りがかったんだが、一体……？」

なんて幸運！　と思いながら、アーシャは息せき切って頼み込んだ。

「お願いします司祭様！　ここの土地の司祭がワイロをもらって審判をねじ曲げようとしてるんです！　なんとかしてください！」

両手を祈るように握りしめて見上げると、困惑した様子だった青年が眉をひそめる。

「審判をねじ曲げていると？」

「この辺で一番の地主のロンハって男が、結婚でうちの土地を自分の物にしようとしてるんです。このままじゃ、偽の審判結果で結婚させられちゃうんです！」

アーシャはこれまでのいきさつをかいつまんで説明した。

おおまかな話を聞いた青年司祭が、少し思案した上で何かを言うとした時だった。

「見つけたぞ！」

大声を上げ、松明を持たせた従者と黒衣の老人と共に走ってくる者がいた。ロンハ達だ。

「我が麗しの花嫁よ、機嫌を直してくれ。私達の愛の巢へ戻ろうではないか」

「結婚するつもりはないって言ったでしょ！」

愛の巣ってナニ！？ と、気持ち悪さに背筋がぞつとしたアーシヤは、反射的に怒鳴ってしまう。が、ロンハは余裕の笑みを浮かべたままだ。

「婚儀の式には君の両親も呼ぶんだぞ？ 先ほども挨拶に来てくれて、泣ながらに娘を頼むと言っていた。婚礼までちゃんと君を預かるからと約束しておいたからな」

ロンハの言葉に、アーシヤは思い切り顔をしかめてみせた。

「嘘つき！ 誘拐犯！」

「何を言うか。審判は神聖なもの。私の審判結果を司祭殿に説明いただいて、ご両親も納得しただけのことだが？ なぁグレブ司祭殿」それはもう。ロンハ殿の審判結果によりアーシヤ殿がご縁のあった方だと判明したと話したら、ご両親も納得して帰って下さったのですよ」

一見すると好々爺にしか見えない老司祭グレブが何度もうなずく。

アーシヤは唇を噛みしめた。

司祭から直接審判の結果だと告げられたら、引き下がるしかないではないか。

「では、審判を受けたのはその男だけで、この娘は受けていないのだな？」

唐突に話に割って入った青年司祭に、ロンハが眉をひそめた。

「そちらはうちの花嫁に何の用ですかね？ 着衣から司祭殿のようだが」

「この娘から、審判に疑いがあるとの告発を受けている。この案件は私が預からせてもらうこととする」

「し、しかし祭司府所属の者でなければ、司祭の審判に対する審査



権はないはず……?」

首をかしげるグレブ司祭に、エクレシスは堂々と言った。

「証明ならここにある」

そう言つて青年司祭は、懷から小さな巻紙をとり出した。

いや、紙ではない。布だ。

厚手の布は、縁が金と朱の糸で縁飾りがどこされ、中央に文字が金と緑の糸で綴られている。水に濡れようともし決して文字が消えぬよう、特別に設えられたその布書簡には、紅の翼持つ竜と太陽を意匠化した紋章が縫い取られている。

どんな聖堂にも刻まれているからアーシャにもそれが何なのかわかる。

天上の王と呼ばれる祭司王の紋章。

このアロイス王国に住んでいる以上、幼い頃からこの紋章と共にたたき込まれている言葉がある。

国王は地上を統べる王。

けれど精神は天上の代理人である祭司王に従うべし、と。

「私は祭司府の枢密院顧問官エクレシス。この娘アーシャの訴えにより、私が祭司府にて『前世法』に基づく審判を担うこととする」  
「す、すうみついん!？」

ロンハは呆然と口を開けたままエクレシスを凝視する。

そしてアーシャは、青年司祭エクレシスの意外な正体に、反論することも忘れ、呆然とその顔を見上げることしかできずにいた。

## 第二話

アロイス王国には、国王と並ぶ権力を持つ者がいる。それが国教の守護者である祭司王だ。

時と運命の神ラトレイアの奇跡を操る力を持つ者が司祭の資格を得るが、その中でも強い奇跡の力を持ち、一定の条件を満たした者が、枢密院にて選出されることになっている。

エクレシスはその、祭司王を選ぶことのできる枢密院顧問官だというのだ。

「本来なら管轄の司祭の仕事に割り込むには、様々な手続きがいるだが、私にはその権限がある」

堂々と自分の権力について語る彼の言葉に嘘はない。枢密院顧問官ならば、各地域に派遣される司祭達を統括する立場の人間だからだ。

周知のことをわざわざ口に出しているのは、エクレシスがアーシャの不安をとりのぞこうと考えたからだろう。

自分が必ず審判をとりおこなって、アーシャの嫌がる結婚の無効を証明してみせると。

審判により証明された前世の縁を理由にされた場合、教義に反するため断りにくい。そのため、ロンハが『審判を受けた』と主張する以上、アーシャに婚姻を迫っても誰も止められない。

だから司祭を抱き込んでいるロンハの申し出を拒否するには、彼らの嘘を暴かなくてはならないのだ。

そのためにエクレシスは審判を行うと言うのだが、

「なのに何故君は、審判を嫌がる？」

真剣にアーシャの訴えを聞き入れたからこそその疑問に、アーシャは口が重くなる。

なかなか話さないアーシャに、エクレススは呆れた様子もなく、アーシャを背負ったまま歩き続けた。

茨を伝って壁を上り下りしたアーシャは、思ったより手足を怪我していたのだ。

とりあえず詳しい説明を聞きたいという彼を、夜も遅いから宿へ案内しようとしたアーシャは、痛みで歩けなかった。そこでエクレススが彼女を背負ってくれた。

アーシャは申し訳なくてたまらない。

司祭として地位の高い人なのに、初対面のアーシャの訴えを聞いてくれるほど、職務に真面目な人なのだ。

でも、そんな人だからこそ言いづらかった。

ぐずぐずとしている間に、エクレススは宿へたどりつく。

顔見知りの女主人は夜半に訪れたアーシャと青年の組み合わせに驚いたが、意味ありげな顔をして部屋へ案内してくれた。

「話の前に、傷の手当てだな」

部屋に入ると、エクレススはアーシャを部屋の隅にある寝台に座らせ、手足の傷の手当てをしてくれた。

ぐるぐるに巻いていた布をとり、女主人に頼んで運んで貰った水で洗い流し、薬を塗ってくれた。

「ありがとうございました」

手当てが終わると、アーシャは深々とエクレススに一礼した。

司祭は多少は医療も担うとはいえ、枢密院の顧問官なんて偉い人の手をわずらわせてしまったのだ。恐縮するアーシャに、エクレススは「気にするな」と言いながら、アーシャと向かい合わせになる

場所に、椅子を持ってきて座る。

「さて、なぜ審判を受けられないのか、話して貰おう」

再度の追求に、アーシャは抵抗をあきらめた。

そもそも、エクレスに助けを求めたのは自分だ。審判を受けるのが一番良い方法だというのもわかっている。

ただ神の意志の元、過去を尊重して生きている司祭である彼に話したら、怒られるのではないかと思うと恐かった。

「……怒りません？」

だから叱られた子供のようなことを聞いてしまった。

「信者の告解を聞いて、怒る司祭など聞いたこともないが」

エクレスはそう答えてくれる。けれど怯えているアーシャは、淡々とした口調すら恐いと感じていた。

「それもそうですけれど……」

「怒られそうな理由なのか？」

「多分、そうかなって」

「ならば決して怒らないと約束しよう。とにかく聞かなければ対処法も考えられないからな」

はつきりと言ったエクレスが、アーシャの手に触れる。

いつのまにか膝上で手を握りしめていたことに気付いたアーシャは、エクレスの手の温かさに顔を上げる。

エクレスは冷たい月のような無表情さではなく、望月の光に似た柔らかな笑みを浮べていた。

「心配することはない。私は司祭として何人もの前世を見てきた。その中には大罪を犯した者もいた。そのことを恥じて泣く者は多い。

けれどその罪を恐れてはいけないのだ。それを補うために未来が、現在がある」

語ったエクレシスは息をついて続ける。

「アーシャ。君の杞憂が同じ理由かはわからない。けれど前世と神の奇跡に関わることは、知らずにいる人間には常に不安なものなのだ。司祭という職にある者は皆、それをきちんとわかっている」

真摯に語りかけてくれるエクレシスに、アーシャはようやく決意を固めた。

「そう、なんです。あたし……こわいんです」

ぼつりとこぼせば、言葉はどんどん溢れてきた。

「五歳の誕生日に、みんな司祭様の祝福を受けるじゃないですか」  
子供が順調に成長していくよう、ラトレイア神の祝福を授かる儀式がある。

その祝福を受けると『審判』のような術ほどではないが、ラトレイア神の力の影響で前世をわずかに垣間見る者がいるのだ。

普通なら『神の恵みの深い子』として本人も家族も喜ぶような事だが、

「あたしは前世の記憶を見て、泣き叫んだんです」

恐怖で記憶がほとんど打ち消されてしまっているが、わずかに何を見たのかを覚えている。

散らばる茨の花弁。

白い花が、血を浴びて深紅に変わる様。

体を棘で刺される痛み。

「恐くて、聖堂へ行くのも一時は泣いて嫌がったから、神の力を拒

否するなんてと親にはひどく叱られました。今は聖堂に行くのは恐くないんです。司祭様も恐いとは思いません。だけどまだ……覚えてるんです。それを見せた神さまの力が恐くて」

また、同じ思いをするのは嫌だ。審判を受けたら、もっとひどいものを見なければならぬかもしれない。

それが怖い。

思わず手に力が入る。が、そこで握っているのがエクレシスの手であることを思い出し、アーシャは慌てて離す。

「あ、ごめんなさい、痛くなかったですか？」

「いや、女性の力で握られても、さして痛くはない」

「でもあたし、斧でいつも薪を割ってるし、山羊とか引きずって歩くこともあるし、王都に住んでいるお嬢様みたいに、か弱くないですし」

「棘の怪我は痛まないのか？」

言われてアーシャは微笑んでみせる。

「多少ちくちくするぐらいですから。足よりは痛くないです」

「そうか？ ああ、ここにも傷があったな」

エクレシスは呟くように言って、アーシャの頬に手を伸ばす。耳のすぐ近くに指が触れた。確かに傷があったのだろう。わずかな痛みとともに首筋を震わせるような感覚がはしり、アーシャは肩を震わせた。

「痛んだか？」

問うエクレシスにどう言っているかわからず、アーシャはうなずく。

エクレシスはアーシャに塗り薬を渡した。

「塗ったら、もう今日は休むといい」

わかりましたと答えようとして、アーシャは首を傾げる。

「あの、家に帰りますよ？　ここは司祭様がおとりになられた部屋ですし」

「問題ない」

短く答えたエクレススは、扉を叩く音に立ち上がり、宿の女将から物を受け取った。

一つは女物の靴で、寝台の側に置いてくれる。枕元には女性物の服。寝間着に裸足で脱走したアーシャのために女将に手配を頼んでくれたのだろう。

最後に残ったのは毛布だ。

椅子を木枠の窓辺に置くと、エクレススは毛布を自分で引き被り、そこに座った。

「私は座ったままでも充分眠れるからな。気にしないでくれればいい」

そう言って、彼は窓枠にひじをついて目を閉じようとする。

「ちよつ、あの、それなら私が……！」

自分を助けてくれる司祭に、そんな不便をかけるわけにはいいかない。

説得しようとしたアーシャの言葉を、エクレススは遮って言った。

「私も、前の自分の記憶を見るのは恐かった。だが恐怖を克服して全てを知ったおかげで、様々なことを学べたと思う。たとえば、保護すべき者から離れないことを」

アーシャを突然攫ったロンハが、また来ないとも限らない。

そのための警戒だと言われ、脱走したての上、確かにロンハがまたきたらと思うと恐かったアーシャは、素直に従うことにした。

### 第三話

次の日、アーシャは事情説明のために家に戻った。  
もちろんエクレススも付き添ってくれた。

突然帰ってきたアーシャを見て、両親は泣きながらエクレススに頭を下げた。

アーシャがロンハを嫌っていたことは知っていたが、審判を覆すなど無理だとあきらめていた両親は、審判を行なってくれるというのでほっとしたらしい。

唯一不安なことは、アーシャが祝福の際に恐怖感を持ってしまうことだったようだ。

が、本人が決心したことをエクレススが落ち着いた様子で請け負ってくれたことで、何もかもお任せしますと恐縮していた。

「あんたの弟のピエロットの世話は、ちゃんとしておくから。やる  
と決めたんなら、ラトレイア神のお力を借りて、ロンハの横っ面を  
張り飛ばしておいで」

最後にそう言って送り出してくれた。

横っ面を張り飛ばすのは、別に神さまの力を借りなくてもできる  
だろう。そう思いながら、アーシャは過激な発言にエクレススが引  
いていないか横目で確認してしまった。

が、エクレススは小さく微笑んでうなずいていたのでほっとする。

それから王都へ出発しようとしたのだが、馬車を拾おうとした二  
人の元に、ロンハがやってきた。

自分も審判の結果を見届けたいというロンハは、彼の審判を行っ  
た関係上自らも祭司府へ行かなければいけない老司祭クレブを馬車



に乗せていくのだという。

だからアーシャとエクレススも同乗してはどうかと誘ったのだ。

アーシャ達の住む町は王都からひどく離れた場所ではない。

が、王都まで行く馬車に乗るには、いつ通るか分からない乗り合い馬車を待つか、誰かに同乗させてもらうのが常だ。いそぐべきだと判断したエクレススに言われ、アーシャは同乗を了解した。すると、

「アーシャと初めての旅をするんだから！」

とロンハがはりきって用意した馬車は、クッションを二重に敷いた、内装も木目の綺麗な馬車だった。

二台に分乗したものの、ロンハと同乗することになったアーシャは落ち着かない。が、エクレススも一緒に乗ってくれているので、内心ほっとしていた。

そんなエクレススが、不意に尋ねてきた。

「そういえば弟がいたのか？ 体の具合でも悪くしているなら、診てやればよかったか」

おそらく見送りに『ピエロット』がいなかったため、そう考えたのだろう。

「いいえ。あの子は見送りに連れて来るわけにはいけません。だってヤギなんですから」

「……ヤギが、弟？」

不思議そうな顔をするエクレススに、アーシャは笑う。

「あたしに異様に懐いてたんで、両親や近所の人に『弟みたいだ』って言われて。で、そのうちみんながあたしの弟扱いするようになったちゃったんです。今はたぶん、他のヤギと一緒に放牧中だと思います」

ます」

「君の家は、放牧を？」

「ええ」

アーシャはうなずく。

「ヤギの他にもヒツジを飼ってますよ。ヒツジも遠くから眺めると、もこもことした小さな雲が緑の丘で動いているように見えて、とても可愛いんです」

和やかな風景を思い出しながら、アーシャは覚悟を決めよう、と思った。自分達家族やピエロット達の思い出が残る丘を守りたい。そのためには、審判を受けるしかないのだ。

怖さも、弟達を守るためになら我慢できそうだと思えた。

「そうか。君は……」

エクレシスの呟きは、はっきりとは聞こえなかった。聞き間違いでなければ、夢を叶えたんだと言ったように聞こえたのだが。

「え？」

もう一度聞き直そうとしたところで、ロンハが話しかけてきた。

「ほらアーシャ、もう町の外へ出たよ！」

確かに、見れば町を囲む森の中にさしかかったのが、馬車の窓からよく見える。

王都までは馬車ならそれほど遠くない。着いてしまったら、もう審判は逃れられない。

覚悟を決めなければならぬのだが、アーシャは目の前を茨の花がよぎった気がしてぎゅっと目をとじた。

「大丈夫かい？」

その様子にロンハが気づいたようだ。

「別に無理をしなくてもいいんだよ愛しい人。君が運命の人だったことは、僕が審判を受けて承認されてるんだから」

正面に座るロンハは、にこにこことアーシャに話しかけてくる。彼は以前からアーシャが前世を怖がっていることを知っているのだ。

「馬車については感謝してるけど、ウザイ」

しかもロンハが用意した馬車が、乗り心地が快適なことなんだか悔しくて、アーシャは天鵝絨の座席と、上に置かれたくつしよんをばふばふ叩いてしまう。

「嘘はついていないよ。どうしてそんな風に思うんだい？」

「あなたが街の女の子十数人と関係持ってたこととか、全部こっちは知ってるのよ？ それなのに会えば悪口ばかり言ってたあたしに興味をもつなんて、おかしいに決まってるじゃない！ 絶対うちの土地がほしいからなんだわ！」

「嫉妬かい？ 可愛いなあアーシャ。僕の愛が欲しいならそうと云ってくれば」

身乗り出し、ロンハが手を伸ばそうとしてくる。

叫びそうになったアーシャだったが、横から腕を引かれ、ころつと座席の上に倒れた。正確には座席の上というより、隣に座っていたエクレススの足の上だった。

「うう、ううごめんなさい！」

司祭様の膝上に失礼をしてしまった。

思わず息を飲んだアーシャは、飛び起きてエクレススに必死で詫びた。

「気にすることはない。まだ本調子ではないのだろうから、休みな

さい」

エクレシスは表情も変えずに淡々と告げてきた。

夜中の脱走劇の直後から、アーシャは微熱を出しているのだ。手足に怪我をした上、寝間着姿で外を走り回ったせいだろう。

「なんだ体調が良くないのか？ 少し馬車を止めようか？」

ロンハが眉をひそめてアーシャを見る。

「そうした方が良くかもしれないな。王都まではそれほど遠くないので、急ぐ必要もないだろう。飲み物など口にさせてあげては？」  
提案したエクレシスを少し微妙そうな表情で見ながら、ロンハはうなずいた。

すぐに馬車が止まり、ロンハはもう一台の荷物や従者を乗せている馬車へと走って行ってしまう。

「……平気か？」

尋ねられ、アーシャはエクレシスを振り返る。

「もし彼と一緒に乗ることで落ち着かないのなら、私から審判前に話があるからと離れるよう説得するが」

エクレシスが氣遣ってロンハを遠ざけてくれたのだとわかり、アーシャは謝る。

「すみません、あれこれと配慮してもらって」

「いいや。ただ君にはきちんと考える時間が必要だと思ったのだ。

……審判を受けるのは、今でもまだ気が進まないんだろう？」

問われ、アーシャはうつむいてしまう。

理由は話したし、エクレシスは本当に怒らずに聞いてくれた。だからほっとしたのだけれど、やはり前世への恐怖はまた別だった。

と、そこへ御者が馬車を進ませると声を掛けてくれた。

王都まで、馬車ならあと半日でたどりついてしまおう。

もう覚悟を決める時間が少なくなっていることを再認識し、動き出した馬車の中で、アーシャは緊張を深めた。

それを少しでも払拭できないかと、エクレスに尋ねてみた。

「司祭様達は、職位を得るために審判を受けるんですよね？ 恐く

……なかつたんですか？」

エクレスは穏やかに答えてくれた。

「恐ろしいとは思った。私は牢獄の中に閉じ込められた後、殺されたから」

「え……」

月のように綺麗な彼の過去は、思いがけず暗く重いものだった。

「だが知った後、自分のことに深く納得した。現世の自分はその時の願いを叶えているのだと。今も、その思いは続いている」

## 第四話

「あいつは……もしかしてアーシャを狙ってるんじゃないのか？」

審判について説明があるのでと言われ、渋々もう一台の馬車に乗りかえたロンハは、いらいらとつま先で床を叩き続けていた。

長時間続くと、さすがに聞いている方も苛つきそうな音だが、高齢故の経験からか、一緒にいたグレブ司祭は特に表情も変えずに言った。

「司祭達はそんなことなどしませんぞ、ロンハ殿」

「わからないだろう。司祭だって人間だ。しかも婚姻に規制はないんだぞ」

前世を重んじる神を奉じるからこそ、今生でのささやかで普遍的な幸福を司祭達も禁じられたりはしないのだ。

「出会われてからまだ一日ですぞ？」

「一目惚れかもしれない。アーシャは可愛い方だからな」

グレブ司祭が「のろけですか？」と呟く声は小さく、ロンハの耳には届かなかった。

「とにかく、司祭というものは前世について悩む者全てに手をさしのべるようにと教えられるのです。おそらくエクレシス殿もそれに則っているだけでは」

「司祭殿は怒りを感じないのか！？ 自らの仕事を邪魔されたようなものだろう？」

どうにかして同意を得たかったロンハは、淡々と言葉を並べるグレブに詰め寄った。

ロンハでも商売の交渉中、自分の見立てを横から否定する人間が現れれば気持ちが悪立つ。それぐらいの苛立ちはグレブにもあった

だろうと思ったが、

「アーシャ殿は私から審判を受ける事は怖がっておりますからな。それに出会うべくして会う者はやはり存在するのですよ。それすらも前世からの縁が綾なす不思議と申せましょう。アーシャ殿はおそらく、自らの魂と向き合うためにエクレシス殿と出会われた。それゆえ審判を行うことになったのだと理解しておりますれば」

「腹も立たないということか。商売人とは根本的に考え方が違うんだな」

「商品ではありませんからな。魂のたどる軌跡と縁は」  
グレブ司祭は神の印を両手で結び、目を閉じて短い祈りを捧げる。その内容に、話す事に気をとられてとまっていたロンハの足が、再び床をこつこつと叩きだす。

「王都以外の場所に、枢密院顧問官がいても縁なのかよ……」

エクレシスがその地位を持つからこそ、グレブも二つ返事で従っているのだ。

そうでなければアーシャに審判を受けさせる必要はなかった。アーシャは前世を見るのが恐いのだ。だから彼女に審判をうけさせることなく、済ませようと思ったのに。

「確かに珍しいことですな。祭司王の巡幸に付き添うか、大きな事件がある場合でなければそうそう動かれない方々です。まあ、故郷へ里帰りされていたのかもしれませんが」  
ほっほっと笑うグレブ。

「故郷か……」

その時ロンハの頭の中に浮かんでいたのは、そこからどうにかしてエクレシスをつつく材料を見つけ、アーシャの審判を止めさせら

れないかということだった。

王都の祭司府に到着すると、馬車に慣れてないこともあってかアーシャは早々に府内の宿泊所で休んでしまった。

エクレススがいなければ、アーシャにこんな無理をかけることもなかったと苦々しい気持ちで見送ったロンハは、さっそくエクレススについて情報を求めて歩いた。

まずは部屋を用意してくれた司祭見習いの少年だ。

「枢密院顧問官殿は、まだお若いのにその地位に推挙されるとは、本当にご優秀な方ですね」

そう褒めれば、少年はにこやかに答えてくれる。

「はい。エクレスス・ケルシュ殿は私ぐらいの年から司祭としての才能を発揮されていらした希有な方で」

「才能というと？」

「前世を遡る術です。本来ならば長い修行の末に獲得するものですので、そのため司祭になるのは非常に時間がかかるのです。けれどエクレスス様は、教えられてほとんどすぐに術を操り、老練な司祭様の力をも一年で飛び越されてしまわれたとか」

「それはまた……神童というやつですか？」

「そう申し上げても良いかもしれませんがね。ただそうして神の業に近い方は、多大な苦難を得た方ゆえに、神が力を与えられると聞きます。なので、ご自身の前世を見られた時は大変苦しい思いをされたのではないかと」

少年は来客への礼節を重んじてかこれ以上しゃべらず、早々に退室してしまった。

エクレススの優秀伝説を聞かされて終わったロンハは、面白くな



い気持ちで部屋を出た。そして次に目を付けたのは、祭司府内の女性達だった。

庭の枯葉を掃き清めている数人の中年女性達に近づいたロンハは、アーシャが欲しいと言えはすぐ差し出せるように用意していた菓子の一部を、彼女達に渡した。

「神を奉じる場所を清められる、とても素晴らしいお仕事をされている皆様にお会いできて光栄です。ちょうど菓子を持っていましたので、お一ついかがですか？」

菓子と聞いて、彼女達は小さくだが歓声を上げた。

喜ぶ彼女達に、ロンハはなぜ自分が祭司府にいるのかを問われ、諸々のことは隠してエクレススの力に頼り、親族の女性を見て貰うことになったとだけ話した。

すると彼女達は自らエクレススについて語ってくれた。

「ああ、エクレスス様帰っていらっしやったのね」

「これで目の保養ができるわー」

「そういえばエクレスス様ってどこ行ってたのかしら？」

「ほら、あれよあれ。祭司王様が愚痴ってたってやつの関係じゃないの？」

ロンハは「祭司王が愚痴？」と目を丸くする。

「エクレスス殿は、祭司王様と折り合いが悪いのですか？」

女性達は、そう尋ねたロンハを、これから親族が審判を受けるにあたって不安を感じたと思っただけらしい。

「大丈夫。あの方は申し分ない以上に能力をお持ちの方ですもの」「そうそう。だから祭司王様があの方を後継にとおもってらっしゃるほどなんですもの」

「だけど祭司王になるために必要な条件が、あの方は一つ足りてい

らつしゃらないの。だからどうにかするようにおっしゃって、無理矢理搜索の旅に出すのですわ。けれど、エクレス様は乗り気じゃないみたいで」

だから祭司王が側近に愚痴った、ということらしい。

「祭司王になるのであれば、さぞかし厳しい条件なのでしょうね」  
エクレスにはどうやらほとんど隙がないようだ。そう思って嘆息混じりに言ったロンハだったが、女性達の答えに驚く。

「いいえ。だって前世で関わりのあつた人を連れてくる、というだけの条件なんですもの」

祭司王になれるだけの能力があれば、まず前世で関わりのあつた者を探すことは造作ない。

ただそれが偽りのないものであると証明するため、その人を捜し出し、祭司王に承認してもらわなければならないのだ。エクレスはそのために旅に出されていたらしい。

掃除係の女性達から離れ、ロンハはつぶやく。

「そういうことが……」

一目惚れではなく、エクレスがアーシャと前世で関わりのある人間だったとしたら。

これまでのエクレスの行動も納得できる。祭司王になる条件を満たすため、アーシャに思い出させようとしてるのかもしれない。

「

アーシャは怖がっているのに、思い出させようっていうんだから変だと思ったんだ」

しかし「自分」から離れた後のアーシャは、ひどい目に遭っているはずだ。

ロンハは決意した。

明日の朝になったら、アーシャを説得しよう。  
彼が祭司王になるため、利用されているのだと言えば、彼女はあきらめてくれるかもしれない。

## 第五話

王都に到着するまで長時間馬車に揺られ、微熱があったアーシャは具合を悪くしてしまった。

這々の体で祭司府へ入った後は、案内された部屋ですぐに眠ってしまったのだ。

気づけば辺りは暗く、既に真夜中になっているようだ。

暗い天井を見上げていたアーシャは、ついつい審判のことを考えてしまう。

いつまでたっても落ち着かず、とうとうアーシャは部屋を出て、気晴らしに歩き回ることにした。

廊下に出ると、蠟燭一本灯っていなかった。

真っ暗ではあるが、白い石を積み上げた祭司府の建物は、大きな窓から入り込む月の光を受けて、ほんのりと明るい。

祭司府の建物は、見慣れた聖堂を大きくし、その両翼にいくつかの居住棟などをくつつけたような形をしている。ここは東側の一画のはずだ。正門までそう遠くはあるまい。

「このまま逃げたら……」

前世を見ずに済む。だけど自分のために心を砕いてくれているエクレシスのことや、家族のことを思うとそれはできない。

すると、角を曲がってくる灯りが見えた。隠れようとあたふたしている間に、相手はこちらに気付いてしまう。

「アーシャ殿？」

そこにいたのは、小さな燭台を持ったグレブ司祭だった。

「司祭様？」

一体夜中にどうしたんだろう、と思う。司祭の仕事についてはよく知らないが、もしかして審判の手続きの関係で遅くなったのだろうか。

「こ、こんばんわ。えーとおやすみなさい！」

後ろ暗いことを考えていたアーシャは、あわてて部屋に戻ろうとしたが、

「落ち着かなかったのでしょうか。審判の前は、誰しもそうなるものです。前世を怖がっているアーシャ殿でしたら、なおさらでしょうな」

見透かされて何も言えずにいると、グレブ司祭は一人納得したように続けた。

「以前の司祭殿から、事情は聞いております。だからロンハ殿の言われる通り、前世法の申請についてアーシャ殿には審判を行なわずにいたのですが……」

一応、アーシャへの配慮があつて、ロンハの審判結果だけで前世法の摘要を決めたらしい。

「あの、本当にロンハは審判を？」

せつかくだから聞いておこうと思ったアーシャの問いに、グレブはうなずく。

「正直に申しましょう。アーシャ殿はワイロだと騒いでおられましたたが」

「あ、その、済みません」

「いえ、ワイロはあったのです」

「は？」

あつさり認められたアーシャは驚く。

「ただ、そのワイロは審判を受けるためのものでして。通常、前世をつつすらと思ひ出した者や、今回のように前世法を用いるなどの必要がない限りは、審判は行なわれないのです。が、ロンハ殿は前世を思い出したわけではございませんでした。ご商売に利益のありそうな、そんなご令嬢と縁がないかどうかを、探したかった様子で」

「ああ、なんか、納得……」

商売のために審判を受けたのなら、ごうつくばりなロンハらしいとわずける。それがどうしてこうなったのか。

「せっかくです。歩きながらお話ししましょう」  
それからグレブ司祭に連れられて、アーシャは祭司府の中を歩いた。

柱廊にさしかかったところで、グレブ司祭はアーシャを庭へ導いた。

月光をきらめかせる池と、小さなせせらぎまで作られた美しい庭は、綺麗に選定された薔薇や生け垣に囲まれている。

散策できるようにつくられたのだろう小道を、歩いていると、少しアーシャの気持ちも落ち着いてきた。

そんなアーシャにグレブは語る。

「前世は重いもの。見れば必ずそんな悠長なことは言えまい、そして頂いたお金は、先日川の増水で畑を駄目にした近くの村に……と思いますてな」

案外、グレブ司祭も一筋縄ではいかない人らしい。

ロンハを改心させるきっかけにするのと同時に、受け取ったお金を災害の被害を受けた村に回するという、一石二鳥を狙ったようだ。

「案の定、ロンハ殿はショックを受けられました。そして貴方に求婚すると宣言したのです。だから貴方のことも決して無下にはなさらないと思ひまして、口添え役に回ったのです」

「あの、ロンハは一体前世で何を見たんですか？」

打算で審判を受けたロンハは、一体何を見たのか。

「さすがにそれは守秘義務の範疇でしてな。当人同士でお話ししていただくならまだしも、審判の秘術で、導き手としてロンハ殿の前世を垣間見ている私の口からは、申せませんのです」

ただ、とグレブ司祭は続ける。

「ロンハ殿が真摯な気持ちであることは間違いありません。そして前世であなたの運命を変えるような、関わりがあつたことも本当です。それでも……気持ちが変わりませんか？」

グレブ司祭はそうアーシャに問いかけた。

これが真実なら、ロンハは間違いなく自分を大事にはしてくれるだろう。アーシャもそう思った。

けれど『違う』と感じるのだ。

今まで反目していた人と友達になるだけならまだしも、今後の人生を一緒に過ごすのは。

きつと審判を受けたなら、ロンハがそう決意した理由がわかるのだろう。

だけどあの茨を、棘に苛まれる痛みを思い出すと、ただ逃げ出すたくなる。

アーシャがうなずくと、グレブ司祭はため息をついた。

そして部屋に戻るため、グレブと共に来た道を引き返そうとしたその時、ふと横を向いた時、庭に金の輝きが見えた。

月の光を受ける金の髪。

灯りに引かれる羽虫のように、アーシャはそちらへ足を向けた。そっと近づくと、庭の奥にある大きな石碑があった。見上げるような高さで両手を上げたほどの幅がある石碑の前にいたのは、月色の髪をしたエクレススだ。

が、彼は石碑の台座に手をついて座り、苦しそうにうつむいていた。

「司祭様っ!？」

驚いて駆け寄ったアーシャは、エクレススに呼びかけた。

「……アーシャ？」

「具合が悪いんですか？ 人を呼びますか？」

問いかけに、エクレススが顔を上げる。そしてアーシャを不思議そうに見た。

それからゆるりと首を横に振る。

「いや。誰も呼ばなくていいんだ。しばらくすれば治まる。ただ……手を」

「手？」

見れば、手はまだ台座の石に触れたままだ。上手く自分で動かせないのだろうかと思いつながら、アーシャはエクレススの手に触れ、台座から離させる。

彼の手はひどく冷たかった。

やはり具合が悪いのだろうか。アーシャは冬、近所の子供に同じ事をしていたなと重いながら、その手を温めるように自分の手で包み込んだ。

その様子を、エクレススはぼんやりと見ていた。やがて息をつき、彼は礼を言った。



「すまない。もう大丈夫だ」

そう言ってエクレシスは立ち上がる。アーシャは彼の邪魔にならないよう、自分の体温であたためた彼の手を離れた。

「こんな夜中に、お仕事の途中だったんですか？　まさか審判の申請とかでお時間がかかったんじゃない？」

自分のせいで大変な思いをしたのではないかと、アーシャは謝ろうとしたが、

「いいや。ここへ来るのは私にとって必要なことなんだ。自分の過去と……つながりがあるから」

「司祭様の過去と？」

首をかしげると、エクレシスが「ごらん」と石碑を指さした。

「その碑には文字が書かれているだろう」

確かに、石碑には細かな文字が刻まれていた。

「ここが以前、レンデルク王国だった頃、王国を最後に支配した王妃が処刑した人々の名前だ。もちろん名前がわからない者の方が多いから、一部にしかすぎないが」

「これは慰霊碑なんですか？」

エクレシスはうなずいた。

レンデルクはアロイスの前にあった国だ。

時の王妃が国王を殺して自らが女王となり、逆らう者は皆処刑したといわれている。さらには周辺の国を侵略しては奴隷売買で贅沢をし、末期になると自国の人々まで奴隷として売り払った。

「私の名前もここにある」

アーシャは息を飲んだ。エクレススは前世、ここで殺されたのだ。

「司祭様たちは、そんなにまでして前世と向きあわなくちゃいけないんですか？」

前世を尊び、それを乗り越えた者こそ神の意を受けし者。

その教えのため、司祭は自ら完全に前世を思い出せた者にしかない。そして彼ら司祭が行う審判の秘術は、あくまで前世をねつ造してねじ曲げる者がいないようにと、神から与えられた力なのだと言われている。

思い出すだけでも辛いはずなのに、克服できるまで向かい合い続けるのかとアーシャが問えば、エクレススは答えてくれた。

「克服するためでもあるが……私にとっては、安心するためでもある」

「安心？」

あんなに辛そうだったのにと不思議がるアーシャに、エクレススは小さく微笑んだ。

「辛かった事は既に終わった過去で、今自分が幸せだと実感したいから。たとえ縁ある人に出会えなくても。さ、あまり夜風にあたっているところこそ体調をくずすのではないか？ 戻ろう」

促され、アーシャはグレブのことを思い出す。

グレブに送ってもらう途中で、エクレススを見つけたのだ。

が、グレブの姿は見えない。もしかしてエクレススと話し込み始めたので、遠慮させてしまったのかもしれない。

なので、アーシャはエクレススに連れられて部屋までの道を戻り始めた。

庭をよぎることをせず、散策路として造られた小道を二人でたど

る。

そうしながら、アーシャはエクレススの先ほどの言葉が気になっていた。

「司祭様は全部思い出しているのに、縁がある人と出会えていないんですか？」

「死んだ年齢が低かったのと、生まれ変わる時代も人それぞれだからね。必ず同じ時代で再会できるとは限らないんだ。それに、人とあまり関わらない生活をしてたせいで、縁があつた人間は少ないんだ」

「そうなんですか……」

覚えていても出会えないというのは、なんだか寂しそうだとアーシャは思った。

そんな風に考え事をして、よそ見をしていたからだろう。

「いたっ！」

アーシャは道を横に逸れ、小道の傍にあつた建物にぶつかってしまふ。しかも茨が壁を這っていた。

腕に棘が刺さったものの、エクレススがすぐに引き戻してくれたおかげで、それ以上怪我はなかった。

一体何にぶつかったのだろうと思えば、それは細長い塔だった。

月光と燭台の明かりに照らされた小さな塔は、積み重ねた石の間に苔が生え、茨がぐるりと蛇のようにからみついている。

その様子にアーシャは既視感をおぼえた。

最初は家にもある山羊の干し草を貯めるサイロと勘違いしたのかと思つたが、違う。

（こんな塔を見たことが……ある？）

目を瞬いたアーシャは、自分の身長よりも高い場所にぼつりと開

いた一つだけの窓に気付いた。そこから自分が中をのぞき込んだ記憶が、ふっと頭をよぎる。

（ここに来たこともないのに、なんで？）

疑問に思う間にも、アーシャは中の様子を思い出していた。

真っ暗な石に囲まれただけの場所。

粗末な木の寝台とかるうじて毛布があるだけのそこに、石床に座り込む月色の。

その記憶を最後に、アーシャは意識が暗転した。

「アーシャ！」

吊り上げていた糸が切れたように倒れていくアーシャに驚き、エクレシスは燭台を放り出して駆け寄った。

抱き留めたアーシャが、微かな声で誰かの名を呼んだ。

それを聞いた瞬間、エクレシスは喜びとも苦しさともつかない気持ちに支配される。

審判を嫌がりながらも、はつきりと言い出せなかったアーシャを説得して祭司府まで連れてきたのは、それを確かめたかったからだ。

彼女が……会いたかった人かどうかを。

アーシャが前世で縁があったこの場所へ来れば、思い出してくれるかもしれないという気持ち、抑えられなかった。

けれどそれは、彼女を傷つける事だ。

「ごめん……」

苦痛に歪むようなアーシャの表情に、エクレシスは呟いた。

彼女が前世過ごしていたのは、酷い時代だ。

アーシャもその時に心に深い傷を負って、だから前世の記憶を怖がっているのだろうと、わかっていたのに。

## 第六話

視界が白いのは、朝の光が瞼を透かして映っているからだと言は思った。

けれど違う。

瞬いてもなお見えるその白は、冷たい大理石の台の上につつぶせているからだ。

顔を上げると、滑らかな石の上を拡がっていく赤い色が見える。

その先には月色の髪をした少年が倒れていた。

「……………！」

アーシャは叫んだ。

恐らく少年の名前だ。

自分でもよく聞き取れないから、何と言ったのかわからない。

後ろ手に縛られていたらしい手が引つ張られ、痛みで顔を上げた。そして目の前には、血濡れた剣を振りかぶった重たげな甲冑姿の兵士が立っていて。

悲鳴は、声にならなかった。

息を細く吐き出すばかりで、ただと恐怖に心臓が胸の奥で跳ねるように拍動し、その力に押されるようにアーシャは飛び起きた。

そして目の前に見えた月色の髪を見て、息を飲んだが、

「落ち着くんだアーシャ。私だ」

その声を聞いて、少年とは言えない顔を見て、ようやくそこにい

たのがエクレススだと認識する。エクレススはアーシャの肩に触れ、二度、柔らかく叩く。

「目が覚めたか？ 君は庭で倒れたんだ」

説明を聞き、アーシャは夢を見る前の記憶を思い出す。

エクレススの案内で、祭司府から逃げようとしていたのだ。けれど変な塔を見ていたら昏倒してしまった。

アーシャは小さく身震いする。まだ、今見たものの余韻が体に残っていた。

どうして自分が前世を怖がっていたのか、今ならアーシャもわかる。殺された瞬間の恐怖が、前世の記憶として魂に焼き付いていたからだ。五歳だった自分が泣き叫んだのも無理はなかったと思う。

「大丈夫か？ アーシャ」

エクレススに優しく尋ねられて、アーシャは彼の顔をじっと見る。

同じ月色の髪。

エクレススに、月色の髪をした少年の姿が重なって見えた気がした。

まさか、とアーシャはハツとする。

同じ髪の色だから、印象が重なったのかもしれない。前世と全く同じ姿の人ばかりということもないだろう。

もしエクレススがあの子だったなら？ とアーシャは思ってしまったのだ。

それにエクレススはここの祭司府があった場所で、牢獄に閉じ込められていたと言っていた。月色の髪の少年も塔の中に閉じ込められていたようだった。

縁がある人間と会いたいと言っていたエクレススは、もしアーシ

ヤがそうだと名乗ったら、喜んでくれるだろうか。

「うん、大丈夫。ありがとう。ちょっと前世のことを夢にみちゃったみたいで、少し恐かったただけだから」

そうか、とエクレシスがほっと息をついた。

「審判ならば、必要な過去だけを見ることができる。君に必要なのは、ロンハ殿との記憶だ。それだけ見るように誘導するから、安心してくれ」

エクレシスの言葉に、アーシャはうなずく。

「ううん心配しないで。大丈夫」

昨日までは恐くて不安で落ち着かなかったが、今、アーシャは妙に心が風いでいた。

胸の中を占めているのは、自分の考えを確かめたいという気持ちだった。

アーシャは部屋に戻り、審判を受ける者のために用意された衣に着替えた。

運命の色は濃い闇の黒と黎明の紫と言われている。

黒い衣に紫の刺繍をほどこされた長衣は、審判を受ける者が必ず着なければならぬものだ。貴族でも、貧しい者でも、皆神の業の前では同じく扱われると示すためである。

町娘らしい衣服から着替えたアーシャは、鏡で確認し、いつもと違う自分の姿に身が引き締まる思いがした。

これから自分は、今までの自分を乗り越えるんだ。そう思いながら呼び出しを待つ。

ややあつて扉がノックされた。少し時間には早すぎると思ったが、返事をして扉を開ける。

と、そこにいたのはロンハだった。

思わず後ろに飛び退いてしまったアーシャだったが、ロンハの固い表情と全く部屋の中に入ってこようとしないう態度に首をかしげる。

「な、何か用でも？」

尋ねれば、うなずきを返してくる。

「話があるんだ。部屋の中では君が気詰まりだろう、庭へ行こう」

誘われたアーシャは、人目があるだろう庭なら、と思ってロンハについていくことにした。逃げ出した相手についていくのは少し恐かったが、今のロンハは最近人が変わったようにべたべたしだした彼とは、ちよつと様子が違ったからだ。

一緒に庭へ出ると、適度に祭司府の建物から離れ、通りがかる人からは見える場所でロンハが立ち止まる。

おかしい。ロンハがこんな配慮をしてくれるなんて。

だからアーシャは尋ねた。

「昨日、変な物でも食べたの？」

調子が悪いから大人しいのかとおもったのだ。が、ロンハは苦笑する。

「今までちよつと強引だったからな。けど、君が審判を受けるならそつまでする必要はないから……」

あれがちよつとなんだろうか、とアーシャは思い返す。

勝手に結婚宣言をした上、従者と共にアーシャを連れ去り、止めを軟禁されたのだ。



「ただ、審判を受ける前に君に教えておかなくちゃいけない事があるんだ」

「あたしに？」

うなずいたロンハは、ゆっくりとアーシャが理解できるように言った。

「エクレシス顧問官は、君を踏み台にするため審判を受けさせようとしてるかもしれない」

「踏み台って……」

地位も何もないアーシャでは、踏み台どころか地面がえぐれた状態と変わらないのではないか。そう思ったが、ロンハの説明を聞いて目を瞬く。

エクレシスは祭司王候補で、そうなるために必要な条件が、前世縁のあつた者を見つけ祭司王に承認を得ることだというのだ。

「司祭など強い術を操れるようになった者は、自分の前世における縁者がすぐわかるらしい。だから君に出会った時エクレシス殿は君が前世の縁者だとわかって……審判を受けるように説得したんじゃないのか？」

本来なら、その能力があれば前世の縁者を見つけることは造作もないはずだ。

けれどアーシャは知っている。エクレシスは前世、ほとんど人と関わる事ができなかった。

だから偶然見つけたアーシャに、審判を受けさせるよう誘導した？

（でも……）

アーシャは違う、と思う。

もし祭司王になるためにアーシャが必要なら、必要な記憶だけを見るように誘導するなどとは言わないはずだ。

「それも、嘘だったら？」

しかしロンハに話せば、厳しい表情で返された。確かに、頼んだからといって、言った通りにしてくれるかはわからない。でもそれでもいいとアーシャは思っていた。

「教えてくれてありがとう。だけど、あたし確かめなくちゃいけなくなっただの」

「それは、彼と君が前世で縁があったかどうかを、か？」  
ロンハは困惑するような表情に変わった。

「まさか君は……彼が好きなのか？ 前世で会ったと感じて、そう思ってしまったのか？」

問われて、アーシャは曖昧に笑う。

あの人を気の毒だと思う。

そして自分が逃げていることで、会いたいと思う彼を悲しませてきたのかもしれないと思ったら。たまらない気持ちになった。

あの恐ろしい記憶に、彼を一人残したままにしたような感覚に陥るのだ。

けれど彼は来なくていいと言うのだ。

そんな優しいエクレスだから、置き去りにしたくなかった。もしかすると、これが恋なのかもしれないけれど……。

「もう、逃げるのはやめるの。あなたとのことも、ちゃんと知ってから判断する」

ロンハにはそう伝える。

するとロンハは静かにうなずいてくれた。

「君が決めたことなら、僕は見守るよ」

正午、アーシャは祭司府の第三神殿へ来ていた。

神殿は祭司府と同じ白石を積み上げて作られている。審判のための場所として使われているせいだ、二十人も入れば一杯になるような広さしかないが、天井は塔のように高い位置にある。そして祭壇側の聖印を透かし彫りされた白い石壁は、色硝子がちりばめられ、外からの光を透かして美しい。

それを背にしてすえられた黒木に臙脂の布が張られた椅子。そこにアーシャは座らされる。

目の前には、審判の術を行なうエクレスと、それを見届ける祭司府側の司祭、そしてグレブ司祭がいた。

いよいよ審判の時が来たのだ。

さすがに緊張するアーシャに、空気を読まずに声を掛けたのは、審判前なら会ってもいいといわれて一緒にきたロンハだ。

「これだけは覚えていてくれ。たとえ君が許さなくても、僕は君を思ってる。置いていってしまった君に、償いたいとそう思ってるんだ」

祈るようなまなざしに、アーシャの心が小さく揺れた。

一体彼と自分の縁とは、償いたいことは何だろう。

その疑問をまず解き明かさなくてはならない、と唇をかみしめた。

ロンハが退出すると、神殿の中が静寂に満たされる。

衣擦れの音をたて、黒い祭司服姿のエクレスがひざまずき、肘掛けにおかれたアーシャの手に自分の手を重ねた。

「では、審判を始める」

緊張で、アーシャの心臓が苦しいほど拍動する。けれどそれも数秒のことだった。

エクレススが目を閉じた瞬間、重なる手から冷たい水が染み込むような感覚がして　　アーシャの意識は暗転した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0273ba/>

---

茨に咲く君と

2012年1月5日22時52分発行